

「国鉄35万人体制」粉碎のために

第2

「35万人体制」攻撃が現実動き出している事態は、この間本紙上でも度々明らかにしてきました。「退職者の半分から三分の一の新規採用者数」ということと、日常的な職場の業務を「地上勤務職場の下請化」と「乗務員の運用効率アップ」を柱に人減し合理化をしていくということを同時並行的にやってくるのが、攻撃の基本的パターンとなっています。

国鉄労働運動の根底的危機

現時点における35万人体制攻撃の最大の焦点は「国電乗務員の運用効率アップ」の問題です。

「仕業の大型化」という名の運用効率アップ計画が、すでに昨年12月段階に東京三局では国労、動労に提案されています。現在よりも割程度「仕業を大型化」しようとするこの提案内容の持つ意味は重大です。

何故ならば、この提案が東京三局に止まらず、千葉も含めた首都圏や近畿圏などの電車乗務員、さらには全国の全乗務員という形で全体化することには目に見えているからです。

しかし、このような重大な問題について、首都圏という決定的な局で提案されているという現実があるにもかかわらず、これを組織全体の問題としてね返してゆこうとする闘争方針が国労からも動労からも出されていません。このことの論議すらされていないというのが実態のようです。ここに、現在の国鉄労働運動の根底的危機があります。

当局の狙いと指導部の裏切り

武操合理化や「53・10」のときと同じように、時期的にも、地域的にもバラバラに、なし崩し的に合理化を「既成事実化」してしまおうとする当局の戦略と、動労内において「安定宣言」等の当局癒着路線を暴力で組合に強要する一部指導部の裏切りがこれほどはつきりと、かくしようもなく現出されているのです。

一地方本部（しかも首都圏の）がこれほど重大な合理化案を受けるところまでいっているのに、動労中央は「知らない」とでも言うのでしょうか。そんなことがあるはずはありません。しかし、このような事態は今にはじまったことではありません。

動労千葉は武操合理化の時から一貫してこのような動労の実態を正すべきだという主張を続けてきました。それに対して「本部」反動暴力分子の千葉地本排除策動もあったわけですが、動労千葉は、暴力も含め、あらゆる攻撃に屈せず反合闘争

を原則的に闘い抜いてきました。

「55・3」を粉碎した動労千葉の闘い

「仕業を3割程度大型化する」という国電乗務員の運用効率アップ攻撃も、地域的には東京を突破口に、時期的には「55・3」に乗務員の運用合理化を強行し、「55・10」の時点では「闘っても仕方がない」という状況にしてしまおう狙いがあることは明らかです。

しかし、79年の秋季・年末闘争における動労千葉の二波にわたるストライキや政府・当局をして年末に動労千葉と同じように不当処分を出さざるを得なくされた国労仙台北の職場・生産点の活性化の状況が、当局と「本部」反動暴力分子の労資一体路線を粉碎し、当局をして「55・10」への先送りをおぼろげなくさせました。

われわれは、反合・三里塚ジェット闘争のさらなる高揚を待ちどわたり、「55・10」で当局が提案できない「得案してきたら粉碎する」という情勢を切拓いてゆかなければなりません。

—つづく—

結成
動労千葉
1980
1月23日
25日
菅平スキー場
主催・動労千葉サークル協議会

日程

23日 スキー教室（クラス別）

24日

24日 支部対抗（回転）

25日 クラス別スキー大会

宿・金城館

TEL 02687(4)2178

信越線上田駅よりバスに

て「東菅平」下車

参加費 九〇〇〇円

（大回転）